

表紙の人

相手の魅力を引き出せる アナウンサーへ



アナウンス研究会
新垣泉水さん

(商学部 商業・貿易学科4年)



テレビ西日本に内定得る

オープンキャンパスのその日、お目当ての人はペダ下に設けられたインフォメーションブースにいた。マイクを通し、来場者にキャンパス内で行われているイベントなどを案内していた。メリハリがあり、通る声が小気味よい。色白の顔に赤いTシャツがよく映える。

「表紙の人」の取材で待ち合わせた商学部4年の新垣泉水さん。この日は、アナウンス研究会の

一員として、オープンキャンパスに一役買っていた。新垣さんはテレビ西日本（フジテレビ系列）のアナウンサーに就職が内定している。そこで、その辺から話を聞くことにした。

アナウンサーは中学生からの夢 2年生でアナウンス研究会に

「アナウンサーは、中学生の頃からの漠然とした夢でした」という。それが目標になったのは、高校生の時だった。

中大附属高校の吹奏楽部の定期演奏会で、中大アナウンス研究会から司会できていた矢島悠子さん（現在、テレビ朝日アナウンサー）を見たのが、アナ研に入ろうと思ったきっかけだった。

「でも実はアナ研に入ったのは大学2年生からなんです。1年生の時はなんだかオタクっぽいな」と思ってた入らなかつたんです（笑）」と初対面の記者にも気さくに話してくれた。

アナ研では、昼に発声や活舌の練習を続けてきた。年に3回、番組発表会があり、司会やDJ、ラジオドラマの脚本まで全て自分たちだけで作り上げる。他大学のアナ研との交流もある。

役立ったツアーコンダクター

3つのアナスクールに通う

さらにアナ研には、ツアーコンダクターの依頼がある。キャンパスツアーでは、50分ほどかけて高校生を中心にした見学者を案内する。

「高校生って近寄り難いイメージがちよっとあったんですけど、話もちゃんと聞いてくれるし、いい子ばかりで高校生との距離が近づいた気がします」。ツアーコンダクターもまた、人とのコミュニケーションを図るうえでアナウンサーになるトレーニングになったに違いない。



新垣泉水(左)さんと同じくアナ研の岸田祥子(右)さん

新垣さんは3つのアナウンススクールに通った。カメラテストや原稿読みの練習を重ねたが、「何よりよかったのは、情報が多く入ったこと」だという。アナウンサーの採用試験は、入社試験の先陣を切って、他の企業よりずっと早い時期に行われる。知りたい情報はアナウンサー志望の仲間か

ら得ることができた。

スクールの先生からは「アナウンサーである前に一社会人であれ」と言われ、先生や先輩、同世代や年下にも敬語を使うよう指導された。お茶やスリッパを出すなどの気づかいも教わった。

試験官は「ジャガイモ」 人の痛みがわかるように

就職活動を迎え、決意を新たにした。アナウンサーになるには競争率が高く、難しいのはわかっていた。「でもどんな仕事も大変なのは変わらない。それなら自分が楽しめる仕事はアナウンサーだ」と覚悟した。

アナウンサーの採用試験では、原稿を読む際に、「いつでもカメラの向こうに人がいるように思い、明るい話題のときは笑顔で読むように心がけました。また緊張をほぐすために試験官はジャガイモ、ニンジンなどの野菜だと思って臨みました」と笑う。

最後に目指すアナウンサーは、と聞くと



「人の痛みがわかるアナウンサーかな。聞かれたくないことなどを質問するときには、痛みをわかった上で質問したり、トークや話術を磨いて、相手の魅力を引き出せるアナウンサーになりたい。情報番組などで今一番輝いている人に話を聞きたいです」

「アナウンサー」という夢を現実の目標にかえ、そして腹式呼吸など日頃の努力を重ねて目標を現実のものにした新垣さん。そんな彼女の活躍をテレビ画面で見られる日が待ち遠しい。

(学生記者 野村茉莉亜 Ⅱ 商学部1年)